

快樂とは何か

今福亮(名古屋大学)

本発表では、快樂とは何かという問いを考察し、快樂とは或る種の感覚であると主張する立場(以下で紹介される諸説のうちの内在説に該当)を擁護することを目的とする。快樂とは何かという問いはそれ自体興味深いものであるし、実際古代からこの問題は哲学者たちによって探求されてきた。しかし、哲学者たちがこの問題に取り組んできたのは、単に知的関心だけからではないだろう。その問題は、人はいかに生きるべきか、善き生を送るためには何が必要か、といった実践的な問題とも深く関連している。すなわち、善き生を送るために快樂は必要(かつ十分)か、といった問題に答えようとするならば、まず快樂とは何か明らかにされなければならない。プラトンなどにおける善き生の概念は道徳的に正しい生という意味合いを含んでいたが、善き生をもつばら幸福あるいは福利におけるそれに限定したとしても、問題の重要性は変わらないだろう。幸福な生を送るのに快樂が必要(かつ十分)かどうかという問題に有意な仕方で答えるには、快樂とは何かをはっきりさせなければならないからである。

快樂とは何かという問題に答えを与えようとする学説には、主に次の三つのことが期待されていると思われる。すなわち、(1) 快樂の本性を明らかにすること、(2) 快樂の多様性を説明すること、(3) 快樂と動機付けの関係を明らかにすること、である。なぜこの三つなのかについて簡単に述べておく。まず(1)は、快樂とは何かという問いにおいてまさに問われていることであるように思われるからである。そしてあとの二つは、(1)を説得的な仕で行おうとした時、あとの二つを避けて通ることができないように思われたからである。さて、すると快樂とは何かという問いに答えることは少なくとも(1)を行うことにほかならないから、快樂の本性について何がしかの言及をしなければ仕事をしたことにはならない。また、我々は実に様々なことを快樂的なものとして経験している。音楽を聴くこと、友人と談笑すること、性交渉など、一見してそれらは全く多様で異質である。こうした快樂の多様性をいかにして説明するかが、二つ目の課題である。とはいえ、多様性を説明すること自体はおそらくそれほど難しいことではないかもしれない。というのも、快樂の多様性はその経験の内容、すなわち、心のうちで表象されているものの内容や、そのような表象を引き起こした世界の側の出来事の内容の多様性に由来するにすぎないと述べることができるし、一見それは自明であるようにも思われるからである。むしろ問題は、このように快樂の内容が多様でありながら、それらが同じ快樂であるのはいかにしてか、ということである。つまり、(1)を行うことで快樂の統一的説明を与えつつ、どのようにしてその多様性をも整合的に説明するか、ということが、(2)のタスクによって課されている難題である。そして(3)についてだが、快樂は通常、無関心な事柄や避けられたりするような対象ではなく、追求される対象である。すなわち、快樂には我々を動機付ける力があるように見える。この一見したところの動機付けの力は必然的なものなのか、言い換えれば、快樂にはその本性上動機付けの力が備わっているのか、あるいは、快樂と動機付けの力との間に必然的なつながりはないとすれば、多くの場合に我々が快樂に惹きつけられるのはなぜなのか、必然的なつながりでないならばそれらはどのような関係にあるのか、というような問題を解決することが、(3)を遂行するにあたって求

められていることである。

すると、快樂の本性についての理論のもっともらしさは、これら三つの仕事をいかに説得的に、かつ相互に矛盾なく遂行することができるかにかかっている。逆に言えば、これらの仕事をどれほどうまくこなせているかを検討することで、各々の理論や理論同士の優劣を評価することができる。したがって、本発表はこの方法に則って諸理論を比較検討する。その際の評価基準としては、第一に日常的な快樂の概念(とそれに関する我々の直観的判断)を用い、第二に哲学的専門用語としての有用性で評価するのがよいと考える。第一の基準を採用する理由は、快樂の概念が(例えばクオリアなどとは違い)日常の概念としての役割を果たしていると考えたためである。しかし、こうした日常の概念が矛盾を含まず、その概念をめぐる様々な問題に答えを与えてくれるという保証はない。そこで、まずは日常における快樂の概念分析を試みつつ、その過程で矛盾が含まれることが判明した場合や、日常の概念ではどのように答えるべきかが明らかでない問題に直面した場合は、無矛盾性や問題解決能力といった、一般によい理論が持つと考えられる性質を当の理論が持っているかどうかによって評価するのがよいと考えたのが、第二の基準を採用する理由である。簡潔に言えば、本発表では、可能な限り日常の快樂概念に適合した仕方で快樂の分析ができていかどうか、なおかつ矛盾なく、様々な問いに回答を与えることができるかによって、理論を評価する。

快樂の本性についての理論は、内在説と外在説、そして態度説の三つに分類されることがある(cf. Haybron 2008, pp.62-3)。内在説とは、快樂的な経験に内在する或る種の感覚がその経験を快樂的なものにしていてと考える立場である。外在説は、或る経験を快樂的なものにしていてのはその経験に対する我々の肯定的態度であると主張する。そして態度説は、命題に対する肯定的態度そのものが快樂であるとする立場である。本発表でもこの分類に従って議論を進めるつもりであるが、この他にも、多元主義的見解や、定義できないという立場もありうるだろう。こうした立場も含めた諸説を退けつつ、内在説を擁護することが本発表の目的である。現時点での構想としては、まず態度説は理論的な側面だけで見れば優れているが、我々の快樂概念と重大な齟齬をきたすという難点を抱えていることを示すことで退けられる。また外在説についても、快樂概念に関する我々の直観の幾つかをうまく説明できていないことを指摘する。多元主義的見解と定義できないという見解については、我々の快樂概念(特にその曖昧さ)を捉えているかもしれないが、理論として役に立たないために問題であると論ずる。このようにして対抗する理論を退けつつ、内在説が最も我々の快樂概念に適合し、なおかつ理論的有用性を備えた仕方で三つの仕事を果たしていることを示すことで、内在説を擁護するつもりである。

引用文献

Haybron, Daniel M. (2008) *The Pursuit of Unhappiness: The Elusive Psychology of Well-Being*. Oxford University Press.